いのちと地域を守る　防災・減災のページ

個別避難訓練

巡回ワークショップ「むすび塾」の一環として、河北新報社は４月26、27の両日、多賀城市明月と岩沼市早股の２地域で、祖父母と孫が避難場所までの経路を歩いて確認する「個別避難訓練」を実施した。停電を想定してショッピングセンターの５階駐車場に徒歩で上った。最初の避難場所からさらに内陸部に移動する「二度逃げ」にも取り組んだ。

（イラスト・栗城みちの）

具志やす子さん（68）、竜成君（11）

傘を差しながら避難ルートを歩いてみて、雨の日の課題を見つけた具志やす子さん（左）と孫の竜成君＝多賀城市

竜成君「雨の日の避難は傘が邪魔になる」

車の出入り 危険を確認

■片手ふさがる

多賀城市明月地区は、仙台塩釜港から約1キロ内陸にある平たんな住宅街だ。震災では、2メートル前後の浸水被害を受けた。

多賀城八幡小6年の具志竜成君（11）と祖母やす子さん（68）は、周辺に高台がないため、自宅近くの大型ショッピングセンターを目指すことにした。

訓練を前に「揺れ」が始まった際の行動を確かめた。竜成君が「テレビをつけて、地震と津波の情報を確認する」と情報収集役を買って出た。ただし、津波警報発令と同時に津波が襲来した北海道南西沖地震（1993年）のように、警報が間に合わないケースもある。

やす子さんが玄関のドアを開けた後、2人はテーブルの下に身を隠した。避難に移る際、やす子さんがすかさず「携帯電話を持って」と声を掛け、一緒に外に出た。

小雨が降っていたため、傘を差した。片手がふさがった。電柱にぶつかり、視界も遮られた。傘は避難の障害になる。2人は雨具をすぐ出せるようにしようと決めた。

間もなく、6方向からの道路が集まる交差点が現れた。信号待ちを嫌う車が、交差点の一角にあるコンビニエンスストアの駐車場を通り抜ける。

周辺には県道仙台塩釜線（産業道路）や、複数の大型の店舗があり、車の出入りは多い。やす子さんは「ここが一番危ない」と指摘した。

大型ショッピングセンターに到着後、やす子さんがエスカレーターに向かって歩こうとすると、竜成君が「停電で止まったら大変だよ」と呼び止めた。階段を使い、5階の駐車場に上って訓練を終えた。

■階段少し大変

自宅から大型ショッピングセンターまで416メートル、避難完了までの時間は10分39秒だった。距離自体はそれほど長くないが、やす子さんにとって階段を駆け上がるのは、少し大変そうだった。

震災時にサンダルで逃げた竜成君はこの日、歩きやすいスニーカーを履いた。雨中の避難で役立つ長靴は、育ち盛りのため、小さくなった。「この間まで履けたのに…」。万が一に備え、用意しておくことにした。

「ほかに避難場所はあるかな」とやす子さんが聞いた。竜成君はすかさず、通学路沿いの別の店舗や、友人宅があるマンションなどを挙げ、祖母を安心させた。

@多賀城市明月

むすび塾

■ お年寄りと孫ら、歩いて確認

個別避難訓練　大津波を想定し、お年寄りと孫らが個別に避難場所やルートを歩く。危険な場所などを確かめ、避難の課題を探る。お年寄りの逃げる意欲を育むのと同時に、お互いの信頼関係を強めるのが狙い。

高知県四万十町の興津地区で昨年６月に始まった。京大防災研究所の矢守克也教授（防災心理学）が協力する。小学生が高齢者の避難訓練に同行し、地域の防災意識を高めている。

谷地沼富男さん（64）、勝太郎君（12）、龍之介君（10）、姫乃さん（6）

県道を通って、玉浦中への「二度逃げ」に取り組む谷地沼富男さんと孫たち＝岩沼市

姫乃さん「道路は車がいっぱいで危ない」
龍之介君「あわててサンダル履いちゃった」
勝太郎君「きょうだいまとまって逃げたい」

@岩沼市早股

手をつなぎより内陸へ

■3差路は警戒

岩沼市東部の早股地区は仙台湾に面した平野にあり、東日本大震災で広範囲にわたり浸水した。

訓練に参加したのは、玉浦中1年の谷地沼勝太郎君（12）、玉浦小5年龍之介君（10）、同1年姫乃さん（6）のきょうだい。海から約2キロ離れた自宅は浸水被害を受けて修繕中で、近くのアパートで両親と暮らす。

まず「揺れ」を想定し、3人はこたつの中に身を隠した。100秒間の揺れが収まると、アパートの隣に住む解体業の祖父富男さん（64）と合流し、玉浦小へ向かった。付近で唯一の高い建物で、震災時も最上階の3階まで逃げた。

途中の市道3差路。カーブミラーが街路灯と重なり、右側が見えにくい。「見通しが悪いから、十分気を付けよう」と確認し合った。

小学校に着いて休む間もなく、校舎が地震被害を受けて危険な場合を考えて、より内陸部の玉浦中に移動する「二度逃げ」を試した。

中学校に続く県道は、工場や復旧工事現場などに向かうトラックが頻繁に行き交う。昨年12月の津波警報発令の際は、避難する車で大渋滞した。

車道と分離した歩道は幅が約3メートルあり、歩きやすい。富男さんは、孫たちと手をつないでしっかりとした足取りで歩き、慎重に道路を横断。「慌てないことが大事」と言い聞かせた。

■落ち着き大切

中学校に到着。二度逃げと合わせ、14分51秒で1・1キロの道を歩いた。みんなの歩くペースが速く、姫乃さんはやや疲れた様子。津波避難階段が整備された仙台東部道路は、さらに内陸部へ1キロ余り離れている。誰からともなく「遠いなあ」と声が漏れた。

富男さんは「じいちゃんや父ちゃんがいないとき、どう逃げるか考えておかないと」と孫たちに語り掛けた。子どもたちだけでまず、玉浦小に避難することを約束した。

ハプニングもあった。龍之介君がサンダルで行動していた。足元を見て「あわてて履いてしまった」と苦笑い。急ぐと歩きづらく、けがもしかねない。靴を履き、落ち着いて逃げる大切さを確かめた。

勝太郎君は「（学校での避難訓練は）友達がいて安心するけれど、今回は緊張した。（きょうだいで）まとまって逃げられるようにしたい」と、兄としての自覚を口にしていた。